
大津波により壊滅的な被害にあった地域病院の復旧の道

(石本幹人、全国自治体病院協議会雑誌 50: 1530-1535, 2011)

2013年6月21日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

【3月11日被災から救出まで】

3月11日午後2時46分東日本大震災発生。地震による岩手県立高田病院の被害は物的被害のみで人的被害はなかった。今までに経験したことのない大地震で、すぐに津波が頭に浮かんだ。高田病院は1階に電源部があり、津波が来た場合、4階にいた人工呼吸管理下におかれる患者3人の呼吸機能の確保が必須であった。午後3時20分過ぎ、津波が来ると市内の有線放送が流れてから、対策本部を3階に設置、一般避難者を3階に、救護所を2階に移したが、その直後には津波が迫ってくるのが窓から見えた。津波はどんどん近づき、ついには病院を飲み込み水が4階から屋上へ向かう階段の中間くらいまで上がってきた。入院患者51人中39人の生存が確認され、人工呼吸管理下の患者3人中1人は看護師と医師の決死的な介助により生存していた。屋上に避難できたスタッフは74人で9人の安否が確認できなかった。一般避難者や患者付き添いを合わせて54名が屋上に避難していた。津波の再来を考え、医療スタッフを中心とした有志の人たちで4階の患者をより安全な屋上の風除室に移した。人工呼吸器装着患者は患者の妻、看護師、医師たちが交代でバックバルブを押し続け生命を維持した。看護師たちの献身的な看護にもかかわらず、12日の朝までに3人の患者が死亡した。12日の夜明けから患者さんの世話係、ご遺体の安置係、屋上から1階までの安全なルート確保係、4階に一般避難者の待機場所を作る係に分かれて作業を開始し、その後、ヘリコプターの飛来、DMATによる患者搬送が始まり、全員が救助されたのは午後4時頃であった。

【震災以後の医療】

◇被災初期

高田市内の医療機関のうち、被災を免れ診療可能なところは、山間部にある国保診療所、精神科病院のみであり、診療所6ヶ所、病院1ヶ所が全壊し、調剤薬局もすべて全壊していた。高田病院のスタッフは13日に米崎コミュニティーセンターに救護所を立ち上げ、①被災した地域を6地区に分け、それぞれに救護所を立ち上げること、②一般診療の確率が急がれることから早期に一般検査機能の確立と薬剤機能を確立すること、③保健師活動と連携し、救護所から避難所に巡回診療を行うことを当初の目標とした。その後、4月4日までに一般検査や院外処方の整備が整った。

◇被災中期

職員全員によるグループワークを行い、当面の目標として、①訪問診療を被災前より充実させる、②外来棟を急速に立ち上げることとした。訪問診療の充実化に向けて、被災当初から全国から集まってきた保健師や高田病院の看護師が連携を深め、被災前の5倍もの訪問診療が可能となった。また、7月20日の外来仮設診療所完成に向けて、7月1日から米崎コミュニティセンターで保険診療を開始し、仮設診療所への引越し後25日より仮設診療所での診療所が始まった。外来診療の幅や訪問診療に関しては、震災前より良くなってきているが、住民が安心して医療を受けられるためには、どうしても入院機能の復活が必要である。今後も、粘り強く県に要望していくつもりである。

【今回の震災を通じて感じたこと】

医療におけるチームの大切さの認識

今回の震災では市との連携の大切を知った。震災後、市ではいち早く『保険医療福祉包括ケア会議連合協議会』を立ち上げ、市内で展開する全ての職種、ボランティアたちが集まり、現況報告、今後の課題を話し合った。これが病院と市の職員、保健師、他の職種の人たちと医療を結ぶ役割として重要であった。また、病院の職員たちもそれぞれの職種の枠を超えて、自分の役割を果たしていった。市全体のチームワーク、病院全体としてのチームワークが今の高田病院を作っていると実感している。